

L 5.43

206

Oct. 1944

67/14
C



AMACHE SEICHO-NO-IYE

{ OCTOBER 1944 }

THE HOLY SUTRA

Nectarean Shower of Holy Doctrines
by Masaharu Taniguchi

M A T T E R

Do not take Matter to be Real

Which you perceive through your corporeal Senses:
Matter is not the substance all things are made of:
It is not Life, nor Truth indeed,
Matter has no Intelligence in itself, nor its own Sensations:

Matter is "Nought" after all,
And has no properties of its own.

It is nothing else than "mind" that gives matter its qualities.

When "mind" thinks of health, a man informs himself that he is ill,

When "mind" dwells upon illness, he informs his heart that he is unhealthy:

It is just in the same way as you see a wrestler upon a cinema screen, when you project his image upon it, or you see an invalid there again when you cast his figure upon it;

Yet the film itself is transparent, and has neither shadows nor colours of its own.

And it is no wrestler, nor an invalid in itself;

It is just the various figures formed in the photo-chemical over the film, transparent and with no colour of its own, that produce the figure of the wrestler or that of the invalid on the screen.

Both the healthy wrestler and the infirm invalid, however, are not of real existence, but are mere shadows produced by means of photo-chemical.

Now set a film in the cinematograph, that is transparent and colourless, and having no figures produced in the ink;

And then shall you no longer see a healthy wrestler who will get old and then pass away after the lapse of some space of time;

To say nothing of the invalid who is infirm and helpless:

You shall see instead, on the screen

Light itself -- Life itself only, and that is brilliancy itself!

Now you must see that your "Life" is the very life that is far superior to that of a healthy wrestler.

Be how healthy soever a wrestler may,

He is destined to fall to ruin, and cannot be healthy in the true sense of the word,

So long as he looks upon his body as Real or his body as his Real Self!

"Health in Reality" cannot be material nature, nor is it in Man's body itself,

"Man in Reality" is not of material nature, nor is it in the body itself:

"Man's Real Self" is not of Matter, nor is it a corporeal body.

There is a Perfect Being behind Matter and Body, that is Consummate and incorporeal.

This is the very being that is Yourself, and that is just the same Perfection of Your Self that has been created by God Himself;

This is the true Life that is constant in Health, and indestructible forever.

Now see to keep yourself above all that is Material, and realize the real aspect of the "Immortal Man", dwelling within yourself.

消息欄 (第八回) 順序不同

(編輯後記)(編輯) 唐津 生

姓名	現在	住所
渡辺邦藏	健在	918-20-F DENVER, COLO
大木信一	△	12G-12-A AMACHE, COLO
井岡ミホ	△	9F-8-E AMACHE, COLO
長谷川つね	△	39-8-F HUNT, IDAHO
福富静江	△	39-8-D HUNT, IDAHO
酒井高一	△	1503-B TULELAKE, CALIF
七刈菊元	△	670B-D TULELAKE, CALIF
藤元富貴次	△	R9-5-3 MANZANA, CALIF
小倉隆二	△	R-6-4 MANZANA, CALIF
中村冬太郎	△	60-3-C POSTON, ARIZO
新野庄作	△	39-6-C POSTON, ARIZO
関 紀道	△	39-4-B POSTON, ARIZO
佐藤樂節	△	207-8-A POSTON, ARIZO
三友友平	△	227-5-A POSTON, ARIZO
室中信次	△	49-12-A RIVER, ARIZO
團野雄作	△	30-12-A RIVER, ARIZO
坂田繁夫	△	12-3-F MCGEEHEE, ARK
星子又雄	△	12-6-B MCGEEHEE, ARK
松原勲節	△	8-13-E HEART, WYO
川上武馬	△	1-24-E HEART, WYO

10H-7-E AMACHE, COLO 本誌編輯部

十月号は、月号に引き續き、數異鈔の研究を掲載せしめて頂き、誠にありがとうございました。悟りには、或は瞑想に一時を過す可き好季節、秋燈下に萬教歸一を説く生長の家より、見ゆる數異鈔の解釋、心静かに緘讀あらん事を切望致します。誌友各位の益々御精進を祈る。

来る十月二十日は、導師谷口雅春先生第五十回御誕生祭に當り、且つ重田生長の家誌友會創立二十二年を祝賀、紀念し、重田誌友一同は茲に本誌執筆者古田氏を煩はし、功德無限なる聖經甘露の法雨の續篇「天使の言葉」を刊行する事となり、古田氏は、夙戒沐浴し、淨寫中でありま。この聖經、天使の言葉は、誌友の方々に、都宛贈呈の予定。

八月下旬、ハート山生長の家指導者なる伊藤正直先生、夏季休暇を利用して、一週間重田に御滞在、ハート山所内に、光明思想普及の結果、起こり、數々の体験の講演、或は座談会、個人指導等、毎日、御訪、下され、重田生長の家誌友一同、誠に感謝致して居る次第であります。

伊藤先生並にハート山誌友一同に、合掌。

○本号より、筆者の住所氏名を記載、宜敷御指導。

10E-5-B AMACHE, COLO 本誌執筆 古田米藏

御報告も申上ぐ可き所善くなる世界より外ない御信念にて御思念下さ
つておられる、御事として實相の完全さを必ず反映するに極つてゐると云ふ
確信を以て御期待下さつた事でありませう。只今では左の足が少し弱い
丈けこの事生命本然の自由自在さが必ず顯現致すものと信じて念じ居り
ます。どうぞ尚引續き御覚え下さいます完全な姿の必ず寫し出され
事を御思念下さいます様切に御願ひ申上げます。
中畧、先は延引々ろ心から御禮申し上げます、

十月十六日

NO. 1018, POSTON, ARIZONA.

合掌
駒塚敬子

唐津御夫妻様

以上は第二信であつて母親の精神波動が如何にその子供に影響するが
は生命の實相中にしばしば立證されてゐるが平素落着いてゐた、駒塚夫
人も第一信當時は氣が急いでいたらしく、九月二十三日を、十月二十三
日と書いてあつた。先頃中より引續き御思念を頂きました御陰様にて、
聖子は完全に癒され昨日退院帰宅致しました。これ誠に御愛念の賜と
感謝申上げてゐる次第で御座ります。足が少しばかり弱いだけで外に
何ともありません。日が経につれて足に力が加へられる事必然なれば、
安心致して居ります。先は取不敢退院帰宅の御報告傍御禮迄、

十一月二十五日

が現われます。有るのではありますせん現はわれるので御座ります。引寄
せるのです。類は類を招ふ心の法則が現象界に現はれるので御座りますから
貴女様の心横へ一つで只善を招ひませう。光明を神を迎へませう。その鑊は調
和と感謝で御座ります。調和と感謝が何よりも大切で。御神示の中にも
天地一切のものに感謝せよとあります通り御主人に吾兒に充分の感謝を捧げ
て下さい。貞淑な愛深い貴女様に不平や不満はさらく無いとは存じますが陰
陽調和して萬物生ずる原則から推して見ますと左は陽性で御座ります。く
どく申し上げるやうですが絶対なる神の創造給ふた神話ります宇宙に悪は
無いので御座ります。どうぞ自己反省して見て下さいませ。確く確く御信
じ下さいませ、吾等神と偕にあり善くなるより外ない世界である事を大畧次
上の如き返事を差し上げて置いた所其の答は左の報告であつた。
○拜復先達は突然あの様な御願ひを申し上げて誠に失礼申上げ恐縮に
存じ上げて居りましたが早速と朝に晩に光明思念をお送り下さいましたとの
御知らせ誠に有難心から御礼申上げます。實は御地にても小兒麻痺病
流行し御所内中々嚴重に取締り致され居る事新聞紙に拜見御同情申上げ
て居りました其後は如何なる御様子で御座りませうかしら。色々細か
い所まで御教へ下さいまして誠に有難御座ります。仰に従ひようくなる世界よ
り外無しの信念にて一日と過す内誠に経過よろしく一昨日より一人で、トイレット
へ行かれる様にまで相成一同感謝の内にある次第で御座ります。時々経過の

十月号 實相體験集 (第七話續き 保管第廿二号)

36

◎小兒痲痺症より救わる。『聖子は斯くして癒されたり』

聖經甘露の法雨並に天使の言葉は「生命の實相」の眞理を要釋せられたるリズムカルの詩と谷口先生は仰せられて居ります。この聖經の讀誦供養により或は夫婦、親子の大調和により多数の小兒痲痺症が癒されてゐる例は生命の實相。生長の家。行。白鳩等の諸書に体験談として掲載されて居ます。祖先供養に就いて二三申しますならば。

一、又祖先祖代々親族九族一切の靈の菩提のために」と前置きなし瞑目合掌萬敬歸一を説く生長の家の由來を告げ聖經の讀誦をします。

一、死産兒、流産兒、〇〇兒等ありは必ず命名して上げる事。

一、讀誦供養は一定の時刻に極めて百ヶ日とか五十日、三十日、乃至三週間、身を淨め誠心誠意、招靈供養すること。

一、神徒ならば始め祝詞を佛敎徒は宗派の經の後にてよろしきリスト敎の方は甘露の法雨の人間の一節を聖書の如く讀むもよろし。

一、供養は夜間燈明を灯すなど其他一家の慣例に従ふ。

次ぎに三界唯心の所現生長の家で申す「心の法則」を申し上げます。環境は心の影で不幸も災難も病氣も一切は自己の心識の所現である。

と生長の家の横の眞理には説かれてゐます。又大調和の世界に神佛は在まし働き給ふのですから感謝のない時不平や不満の心の波立つ時不幸や災難

光の言

重打生長の家読友會

光の言

不信仰は迷信の因

35

恐怖、臆病は究極に於て自卑の一種でありますが、焦躁不安の狀態を喚起し、神への従順——ジツと大きなものにお委也すること——が出来ないやうな狀態に到りしめるのであります。お委也の心がなかり恐怖する、恐怖するからジツと委せて置くことが出来ない。二つの隠蔽は互ひに相反映してますます實相無畏の狀態を隠蔽して行くのであります。實相本源の神に委すことが出来ず、實相無畏の狀態が隠されて来ますと、何か物質的な眼に見えるもので靈妙な働きをするものに頼らずにはゐられなくなる。そのために色々の迷信發生し、偶像崇拜となり、藥物崇拜となり、本源の神を忘れて靈媒に乗り憑つて出てくる色々の靈たちの教へを本源の神の示しと取違へてまことしやかに信ずることになるのであります。茲に亦實相の神を隠蔽する隱蔽を生ずるのであります。靈媒信賴はかくの如く實相本源の神にお委也することが出来ない、不信仰のあらはれなのであります。淫祠邪神の崇拜も、人から見たり「あの人は信心深い人だ」と思はれるかも知れませんが、また本人も自己を信心深いと思つてゐるかも知れませんが、決して本當に信心深いのではありません。それは却つて實相本源の神を信じないから、アキラの神を拜み、コキラの神を拜するやうになるのであります。

◎生死を超えたところに本當の神を見然して生がある

(智恵の言葉)

十月三十一日 言葉の神祕を知る日

34

言葉の力によつて認めるものだけが存在に入る。

〔生命の實相〕

早大出身の政學士、上村謙氏は言語學を深く研究してゐる人である。

次のやふな草稿を送つて來られた。――「言とは音に子音Kなる無意味

の接頭語を飾りたるものです。葉とは端くれ即ち現象の意。然らば音と

は何ぞや。是れ印度、波斯、希臘等に於ける葬火教徒に呼びなされし音

即ち○○と稱するくわの 教典に説く万有に貫通する生命乃至實在

の事也。希臘 オゲセイ・イリアドは皆此の音乃至○○の事にして、

是が又歌とも同じものです。其の證據には「斯う云ふ事を歌つて置き乍

ら」云々の言葉の中の「歌ふ」とは「云ふ」乃至言葉の意味なるに依り

ても知れる。又音無しい人とは、蝶々め人の謂にて、是も音とは言葉で

である事が證さる。

かく日本人の上層をなせるものの名は正しく梵語と同一語で出羽は

(神)、佐分利は SAMA (日神) 幣原は のくみ では餘り梵語其の儘故、こ

れを隠して「て」を入れて「し(て)はら」であり、されば神の意であ

る幣の字があるので、此の幣の字が「しで」と讀む理由が解る譯で字引

には誤である。

んと撥ねて「しんばら」となる。御社の「光明」も「しばら」で光明眞言

に云ふ「じんばら」は此の「しばら」で光明(神)の事です。

ふんばら

ふんばら

ふんばら

十月三十日 大自在の日

33

肉體は無い、物質は無い、現象はない、實相のみ獨在。

（佛教把握）

○聖人のつねの仰せに、彌陀の五却思惟の願を、よく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。……、聖人の仰せには、善惡のふ

たつ総じてして存知せざるなり、そのゆへは如來の御こゝろに善しと思召すほどに知り徹したるはこそ、善きを知りたるにてもあらめ、如來のあしと思召すほどに知り徹したるはこそ惡しきをしりたるにてもありめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、皆もて、それごと、たわごと、まことなきに、念佛のみぞまことにておはしますとこそ仰せは候ひしか。

○もう此の月の頁が終るので數異鈔の總結のところを重要點だけに端折る。「彌陀の五却思惟の願、よく／＼案ずればひとへに親鸞一人がためなり」とは至言である。皆その心持保つべしである。

よく／＼考へて見れば本當に人間には此の世のことの善も惡も本心に判らない。此の「善をしたから救はれる」と云ふやうな自力の判断は耻かゝくて出来ないものである。此の世のこと、善と云ふ惡と云ふ、併しそれはたゞ空言、妄言、實相ではないのである。たゞ念佛——たゞ神想觀——それは如來から廻施せられたものであるから、それのみが實相である。諸君よ實相を觀じよう。

十月二十九日

啟祖と同じ信心を獲る日

32

現象は無い。無いものに引つか、るな。無いものは無いのだ(佛教の地)
○歎異鈔結の條。右條々は皆もて信心のことなるより起り候か。

故聖人の御物語に、法然聖人の御とき、御弟子そのかずおはしけるな
かに、をなじ御信心の人も少くおはしけるにこそ、親鸞御同朋の御
なかにして御相論のこと候ひけり。その中へは善信が信心も聖人の御
信心もひとつなりと仰せ候ひければ、勢觀房念佛房なんどまうす御同
朋達、もてのほかにあらずみたまひて、いかでか聖人の御信心に善信
房の信心ひとつにはあるべきぞと候ひければ聖人の御智慧才覺あろく
おはしますにひとつなんと申さばこそ假言ならめ、往生の信心に於い
ては、またく異なることなし、たゞひとつなりと御返答ありけれども、
なをいかでかその義ありんといふ疑難ありければ、詮ずるところ聖人
の御あへにて自他の是非をさだむべきにて、この了細を申しあげけれ
ば、法然聖人の仰せには源空が信心も如來より賜りたる信心なり、善
信房の信心も如來より賜りて給ひたる信心なり、さればたゞひとつな
り、別の信心にて御座まさん人は源空が参りんずる淨土へはよも参り
せ給ひ候はじと仰せられ候ひしかば、當時の一向專修の人々の中にも
親鸞の御信心にひとつならめ御ことも候。うんと覺え候。

◎「個」を絶したところに「本當の神」があり「本當」の我がある。(智慧の言)

を絶したところに「本當の神」があり「本當」の我がある。(智慧の言)

臣下生長の家友會

発行

十月二十八日 實相の佛を知る日 (◎印生命の真相より) 31

名もなく相もない光が又遠實成の佛であります。〔佛教の把握〕

○念佛まうすに、化佛をみたてまつるといふことの候ふなるこそ、大念には大佛をみ、小念には小佛をみると云へるか。若しこのことはりなんどに、はしひきかけられ候ふやうん。かつは、また檀波羅蜜の行ともいひつべし。如何にたからものを佛前にもなげ、師匠にはどこそとも信心かけなばその詮なし。一紙半錢も佛法のかたにいれずとも、他力にこそをなげて信心深くば、それこそ願の本意にて候はめ。すべて佛法にこそよせて、世間の欲心もある故に、同朋をいひをどさるゝにや。○大集日藏經には、「念佛まうせば化佛を見たてまつる。大声で念佛すれば大きい佛、小声で念佛すれば小さい佛を見たてまつる」と説いてある。これに因みて、布施の大小で大小の佛になると云つたのであらうか。また聖道門の檀波羅蜜、即ち布施行に引つかけたのでもあらうか。いづれにせよ、自分の口から出る念佛の聲の振動の大小や、自力で出す布施の大小で救はれるのたつたら、自力の救ひであつて、それは有限の救ひで、結局 吾々は未始終救はれ切ることとは出来ない、一枚の紙、半錢の財を布施しないでも他力の中に心を投げ込めば救はれるのだ。

◎百圓の御馳走には百圓の貨幣價值があるかも知れませんが、斯く有りたいと云ふ心の中の規範に合致しないときには本當の價值感は湧出て来ない

十月二十七日 佛と俱にある日

夜々佛を抱いて眠る。朝夕還つてともに起く。起坐常に相ふ。語黙居止、身影の如く相似たり。佛の去處を知らんと欲せば、たゞこの語声これなり。

佛の敬の把握

○歎異鈔第十八條。佛法の方に施入物の多少にしたがひて大小佛になるべしと云ふこと、この條不可説なり、云々。比興のことなり。まず佛に大小の分量をさだめんことあるべかりず候ふ。かの安養淨土の敬主の御身量をとかれて候も、それは、方便報身のかたちなり、法性のさとりをひらいて長短方圓のかたちにもあらず、青黄赤白黒のいろをも離れなば、なにをもてか、大小をさだむべきや。

○佛法では供養のお布施の大小によつてお淨土へ往つて大きな佛様になつたり、小さな佛様になつたりすると説いてお布施を慇懃めるものがあるが、言語道斷、以ての外に興ざめたことである。佛には分量大いさなどと云ふものはないし、供物の大小で救はれ方が異ふなどと云ふことはない。阿彌陀佛の身体が大ききなどが御經に説かれてゐるが、それは、相を説かないと判らない凡夫に仰ぐやうに現しくださつた方便報身であるのである。方便のからだの奥に法性法身、眼に見えない、形を超えた實相の法身があるの、これが實相である。それは長いも短かいも、青、黄、赤、白、黒の色をも超越してゐるから、大小などと云ふことは比較の出来ないことである。

十月二十六日 清淨の天地を觀る日

29

このまゝ、佛である。このまゝ、極樂往生してゐるのである。(佛教把握)
○歎異鈔第十七條、邊地の往生をとぐる人、つゝには地獄におつべしといふこと。この條なほの證文に見え候ふぞや。學生たつるひどの中に云ひ出ださるゝことにて候ふなるとぞ、あさましく候へ。經論正教をば、如何やうにみなされてさふらふらん。信心缺けたる行者は、本願をうたがふによりて邊地に生じて疑ひの罪を償ひて後、報土のさとりを聞くことこそ承り候へ。信心の行者すくなきゆへに、化土におほくすゝめ入れられ候ふを、遂に空しくなるべしと候ふなるとぞ、如來に虚妄を申し付けまいらせて候ふなれ。
○純粹の他力信心者になり切れない者は報土のお淨土へ救ひ攝つて頂けないで、邊地と云ふ化土に往つて遂には地獄に墮ちると云ふ者があるそんなことは經釋のごにも證據がない。これが學者と云ふ者から云はれるのだから何と羨ましいことだらう。純粹他力になり切れないでも免れ角念佛申す人は、本願の全的救済を信ぜず、完全に三百六十度廻心出来ないから一旦は化土に生れて、そこで淨められて報土(彌陀本願の報いとして建てられた淨土)へ生れる悟りを開く。化土に生れる者は地獄に墮ちると云ふのは彌陀の全的救ひの誓願を虚だと云ふにひとしい。◎他の缺點をあげたい心が既に神に背いた心である(智恵高)

十月二十五日

信心決定の日

28

生命の眞を形の世界にあらはすのが眞人生である。

（生命の實相）

○信心さだまりなば、往生は彌陀にはからはれまいらせてすることなれば、わがはからひなるべからず、惡からんにつけても愈々願力を仰ぎまいらせば自然のことはりにて柔和忍辱のこゝろも出てくべし。すべて萬のことに付て、往生にはかゝるきおもひを具せずして、たゞはればれと彌陀の御恩の深重なること、つねに思ひいたしまいらすべし。然れば念佛申され候。これ自然なり。わがはからはざるを自然とまふすなり。これすなはち他力にてまします。しかるを自然といふことの別にあるやうに、わがその知り顔に云ふことの候ふよし承る浅ましく候。

○たゞはれと彌陀の御恩の深重なることを常に思ひ出だす」ときに、自然の眞理にて人間の心が柔和忍辱の心になつて來ると云ふことに注目しなければならぬ。肉体は本來無いのであるから肉体と肉体ごころの間違を一つ一つ悔改めるのが救はれる原因ではない。さうかと云つて佛の善惡差別の救ひに甘えて故意に惡を犯せと云ふのでもない。『柔和忍辱の心』は救はれる原因ではなくして、既に救はれてゐると云ふ自覺から來る自然の道理なのである。その自覺から『自然に念佛申されぬ心』が出て來る。自然であるから自分ののはかりぢではない、全く他力である。

十月二十四日 野の百合の如く生きる日

27

野の百合の如く自分は生きたい。野の百合は勞めず紡がない。(彌教把蓮)
○一切の事に朝夕に廻心して往生をとげさふらふべくば、人の命は出づる息入るほどを待たずして終ることなれば、廻心もせず、柔和忍辱のおもひに住せざらんさきに、壽命つきば攝取不捨の誓願はむなしくなりせおはしますべきにや。口には願力をたのみ奉るといひて、心にはさこそ悪人を救けんといふ願不思議にましますと云ふとも、さすが善らんものをこそ救けたまはんずれと思ふ程に、願力を疑ひ、他力を依みまいらする心缺けて邊地の生をうけんこともと嘆き思ひたまふべきことなり。

○本當の廻心は「たのむ心」への全面的三百六十度轉回であつて一行一履の更改ではない。人間の壽命は出る息の入る間も待たずに縛切れるものであるから、一つく悔い改めて尙完全、柔和しい忍辱の心持になれないうちに縛切れてしまつたならば、どんな人間でも救ふと仰せられた攝取不捨の彌陀の願はうそになるのである。一々の行爲の悔改めを云つてゐるやうなことでは、實は如來の本願力に依み奉ると云ひながら、如來は悪人を救けず善人だけを救けると思つてゐるのであるから本願力を疑ふ者で邊地に往生して本當のお浄土へは往生することが出来ない。

十月二十三日 空をと捨て、自由を獲得する日

26

空にして一切を破し已めば空も應に捨つべし。智度論。(佛教の把握)

○歎異鈔第十六條。信心の行者、自然に腹をちたて、あしざまなることをも犯し、同明同侶にもあひて口論をもしては、必ず廻心すべしといふこと。この條斷惡修善のこと、ちか。一向專修のひとにをいては廻心と云ふことたいひとたひあるべし。廻心とは日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたまはりて、日ごろの心にては往生叶ふべからずと思ひて、心との心をひき代へて本願をたのみまいらするとそ廻心とは申しさふらへ。

○信心する人は、自然腹を立てたり、悪いことを犯したり、念佛の同信者たち互に口論することがあつたりしたるよく廻心(いありため)して二度とそんな罪を犯さないやうにしなければ救はれないなどと云ふ人があるが、それは自力で惡を斷じ善を修して、救はれの原因とするのであるから本當の他力信心ではないのである。廻心と云ふことは一々の行爲の惡を一つ／＼善に改めると云ふやうな小さな悔改ではない。本當の廻心とは心が三百六十度轉回して、自力を捨て、佛の本願にたのみ切つて、そのまゝ私のはかり心をせず、まかせる心になることなのである。

◎何者を自分を縛るものはない、自分の心のみ自分を縛る。(智恵の言葉)

十月二十一日 一切の疑はれを無くする日

25

一切の見なき即ち正見なり。更に是れは正見なりと念言

するも亦是れ邪見なり。恒山禪師

佛敎の把握

○和讃にいはく、金剛堅固の信心の定まるを待ち得てぞ彌陀の心光攝護して、ながく生死をへだてけると候へば、信心のさたまるときに、ひとたび攝取して捨てたまはざれば六道に輪廻すべからず。しかればながく生死をばへだてさふらふぞかし。かくの如く知るを、悟るとは云ひまぎらかすべきや。あはれに候ふをや。浄土真宗には、今生に本願を信じて、方の土にして悟をば開くと習ひ候ふぞとこそ故聖人の仰せに候ひしか

○「親鸞聖人の和讃」金剛堅固の信心の定まる時を待得てぞ、彌陀の心光攝護して、ながく生死をへだてける」と云ふのを「信心の定まるときそのまゝ、現身のまゝで彌陀の心光のなかに攝取し護られるから、もう六道に迷ふなどと云ふことはなく、そのまゝ生死を越えるのである。これを悟りと云ふものじや」と云ふ人があるが、氣の毒な間違である。浄土真宗の敎は、今生で佛の本願を信じて、あの世へ往つてかう悟を開くことであると師匠から承つてゐる。「斯う云ふ唯圓坊は肉体と云ふものが、佛の無礙光の障りとなり得ると誤解してゐる信ずる」とは影の奥にある眞性（本物）をハッキリ見ることである（智恵言）

十月二十日 神通自在の日

24

有を捨て、空に着す、病亦然り。還つて溺を避けて火に投ず（佛敎の把握）
○この身をもて悟を開くと候ふなるゐとは釋尊の如く種々の應化の身をも現し、三十二相八十隨形好をも具足して說法利益さふらふにや、是をこそ今生に悟を開く本とは申し候へ。

○これを解釋すると次の通りである——「この身をもて悟をひらくなど」と云ふ人は、考へても見るが如い。本當に悟をひらいたならば釋迦の如く、色々の應化の分身をあなただ此方に出して、三十二相八十隨形好などと云ふ圓滿な人相を具足してゐるか。またその說法たるや、釋迦のやうにその説敎を聽いた人々に色々の利益が現に現れると云ふととがあるか。そんなことが出来る人にして今生に覺を開いて佛になる本意にかなふ人でありうか、先づそんな人は無いではないか。」
この一節は、來世往生を強調するのあまり即身成佛を説く人をあまりに折伏し過ぎた嫌ひがある。「戒行慧解ともに無し」と謙る位ならば他の人の境地は判らないのであるから批判しない方が奥床しいのである。此の世で分身を出して遠隔の人の病氣を癒す人もないではないし、現に生長の家では説敎をするだけで素晴しく人々を救ひ得る人もある。此の身もて……云々」の語は、あまりに「肉体はアル」と思ひ過ぎてゐる。○隠れたる「生かす力」は神である。（智慧の言葉）

十月二十日 生死超越の日

23

何物が生死し何物が去來す唯是一念の妄計 天柱禪師 (佛教の把握)

○おほよそ今生にをいて煩惱遮障を断せんこと、きはめてありがたき

あひだ、眞言法華を行ずる淨侶、なをえて順次生のさとりをいのる。

いかにいはんや戒行慧解ともに無しと雖も、彌陀の願船に乗じて生死

の苦海をわたり、報土のさしに着きぬるものならば煩惱の黒雲はやく

はれ、法性の覺月すみやかにあらはれて、盡十方の無礙の光明に一味

にして一切の衆生を利益せんここにこそ、さとりにてはさふらへ。

○大体、この肉体のあるまゝの此の世で煩惱の障りを断ち切らうと思ふ

ことが極めて有り得ないことである。眞言や法華の淨行の僧侶でさへ

も此の世で全然煩惱を断ち切ることは出来ないのだから次の世に悟るべく

祈るのである。まして戒行も保ち得ず智慧のない吾らは如何にすべき。

たゞ彌陀の本願の船に乗ればこそ、生死の世界を超えて生死なき彼岸

にわたり報土の彼岸に着いたときに煩惱なくなり、法性の月影があら

はれる。是れ偏へに彌陀の他力である。斯の如くして初めて吾々は自

分が佛になるだけでなく、あらゆる方角すべてのところ何時如何な

る罪をも礙りとなりぬ如來の光に融け込んで他の人をも救ふことが

出来るのである。(と云ふ意味。)

○いくら完全になつても「肉の人間」は影であつて眞性そのものではない(智恵業)

十月十九日 明暗を起えて一つの日

22

唱ふれば佛も吾もなかりけり、南無阿彌陀佛。一遍上人

佛敎の把握

○數異鈔第十五條、煩惱具足の身をもて、すでに悟を聞くといふこと。この條もてのほかのことにさふらふ。即身成佛は眞言秘敎の本意三密行業の證果なり、……、四安樂行の感徳なり。これみな難行上根のつとめ、觀念成就のさとりなり。衆生の開覺は他力淨土の宗旨、信心決定の道なるが故なり。これまた、易行下根のつとめ、不簡善惡の法なり。○煩惱だらけの此の身で悟りを聞くことは難かしいが、そんな身で悟を開かないで、自分の中に廻施せられた信心で悟をひろくことなれば易しい極みであるのである。悟の邪魔となるのは此の「煩惱具足の身」であり、その身ありと思へばこそ、肉体が減してから淨土へ往生するなどの考へ方が必要になつて來るのである。また即身成佛と云ふことを爰には大變に難かしい行事のやうに説かれてゐるが、それも此の肉体と云ふものをアルと思へばこそ肉体そのまゝで成佛するのは中々むづかしいと思へるのである。ところが此の肉体が本來無し、本來寂滅の相だと知つたならばこのまゝで肉体も何も無い、唯あるものは佛のいのちだけではないか。即ち其のまゝ、即身成佛ではないか。併し肉体ないと知り得ない人々は、臨終を以て往生極樂の機とするのも悪くはない。

十月十八日 自佛の光明を知る日

21

欲が起らば山ほど起して見よ。假令起るも自佛の光明なり（佛教の把握）
○また念佛のまうされんもたゞいまさとりを聞かんずる期のちかづく
にいたがひていよく彌陀をたのみ、御恩を報じたてまつるにてこそ
候らはめ。つみを滅せんとおもはんは自力のころろして、臨終正念と
いのる人の本意なれば、他力の信心なきにて候ふなり。

○攝取不捨の佛の本願に漏れてゐる人は一人もないのであるから、愈こ
悟りを開く時期が近づくにいたがひいよく阿彌陀佛に依り切つて申
す念佛は、御恩報じのために稱へる念佛でなくてはならない。眞宗は
平生業成であつて、普段彌陀をたのみ奉る心になつてをれば、臨終
になつて念佛を稱へようが稱へまいが、彌陀の救ひの中に攝取不捨也
られてゐるものである。定聚即ち詳しく云へば正定聚の位に
ゐると云ふのである。わしの稱へる念佛の力で罪を滅しようと思ふ
のは自力の念佛であるから忌のである。さう云ふわしの力の念佛であ
るからこそ「臨終正念」を大切に云ふのだが、それは本當の他力の
信心ではない——と云ふ意。
併しその平生の業が必要だと云ふなりは平生彌陀をたのむ心が無いと
きには救はれぬか。他力の救ひには平生業も必要ではない。常に今救
はれてゐるのが人間だと云ふのが生長の家である。

十月十七日 このまゝ救はれてゐることを悟る日

20

肉体は人間ではない、人間の心の痕跡である。

〔生命の真相〕

○たゞし業報がざりあることなれば如何なる不思議のことにも逢ひ、また病惱苦痛せしめて、正念に住せずしてをばうんに念佛申すこと難し。その間の罪をば如何して滅すべきや。罪消えざれば、往生はかなふべかりざるが。攝取不捨の願を依みたてまつらば。如何なる不思議ありて罪業をおかし、念佛申さずしてをばうると速かに往生とぐべし。

○人には各々業報と云ふものがあつて催して來るのであるが、一日一刻も缺がさずに念佛してをうと思つても、念佛出來ないことがある。また「臨終の一念に念佛申して救はれよう」と思つても、臨終と云ふときに病氣の惱み苦しめて、精神朦朧として正念を失つて了つて念佛を稱へることが出來ない人もあらう。自分の力と云ふものはそのやうに儂いものであるから、自分の力で稱へる念佛では中断されることがあるのは止むを得ない。ではその中断された間の罪をどうして消すか。罪が消えなければどうして救はれるか、救はれる道はたゞ一つ。如來の本願に乘托ことである。どんな思はぬことがり罪を犯さうとも如來の本願の中には罪は無いのだから念佛申さずとも救はれてゐるのだ。——この最後の一句こそ生長の家の常に説くところだ。

◎眞理への道はたゞ一つ——人間は神の子だと云ふことだ（智恵の言は）

十月十六日

價なくして受ける日

19

汝のニセ物の假面を剥げ、ニセ物の罪狀をあらはせよ（審判の真相）

○念佛まうさんごとに、つみをほろぼさんと信ぜんは、すでにわれと罪を消して往生せんと勵むにてこそさふろふなれ。もし然からば一生のあひだ思ふこと皆生死の羈にありざることなれば、生命盡さんまで念佛退轉せずして、往生すべし。

○念佛を申すごとに、「これで罪が消る」と信じて念佛するが如きは「念佛申す」と云ふ自己の行爲の力で罪を消すと思つてゐる力みである。これで罪が消える」と云ふ自力の行も必らずしも悪いことはないが、それなりば云ひたいことがある。一生のあひだ常に吾々の思ふ思ふと、生死超越の障りとなる執着煩惱に關係しないことは一つだつてないのであるから、毎日毎日その執着煩惱の數だけづつ念佛を稱へなければ救はれないと云ふことになるだらう。バイブルの中にもイエスは譬をもつてこのことを説いてゐる。或る葡萄園の主人が朝雇ひ入れた園丁も、晝雇ひ入れた園丁も夕方もう仕事の終りつところに雇入れた園丁も、同一の給料を支拂つた。そして葡萄園の主人は神であり、働きの人は人間の譬である。この實話によつてイエスは、人の救はれるのはその働いた分量によるのではなく、神の約束（佛の本願）によるの事を示し給うたのである。

十月十五日 肩の荷を卸す日

18

「窄き門より入れ」とは自力の行を卸して入れとのことである。(生命の真相)

○彌陀の光明にてりされまいりする中へに一念發起するととき金剛の信心をたまはりぬれば既に定聚のくりぬにおさめしめたまひて、命終すればもろくの煩惱、惡障を轉じて無生忍をさとりしめたまふなり。この悲願ましますさずば、かゝるあさましき罪人、いかでか生死を解脱すべきとおもひて、一生のあひだまうすところの念佛はみなことごとく

○然り、彌陀の光明に照りされまいりする故に「一念發起して金剛の信心が発現するのである。金剛の自分の力で起すのではなくして、爰に

ある通り「たまはる」のである。凡夫が信心を起して救はれるのではなくして、如來の本願力が吾々に廻り來つて自然に信心したくなるのである。それは下度、母の慈愛の心が廻り來つて自然に赤ん坊が乳房を吸ふことを知るやうなものである。乳房を吸ふのは、何の教育も受けてゐないで、自然と催して來る。さう思へば自力で救はれるところは一つもない。みんな佛様のお計らいであるから念佛も自分が往生極樂の行を積むといふやうな偉さうな氣持でなしに、如來大悲の恩を報じ、徳を謝すと思つてすべきである。

○ならうと思ふよりも、なれると思つて明るい氣持で努力せよ(智慧の尊嚴)

十月十四日 清富集る日

17

清貧に凝り固まりず、自在無礙の働きを導ぶ。〔生命の實相〕

○歎異抄第十四條 一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべしといふこ

と。この條は、十惡五逆の罪人、日ごろ念佛をまうさずして、命終の

ときはじめて善知識のをしへにて一念ませば、八十億劫のつみを滅し

十念まうせば八十億劫の重罪を滅して往生すといへり。これは十惡

五逆の輕重をしらせんがために、一念十念といへるが、滅罪の利益な

り、いまだわれらが信ずるところにおよばず。

○觀無量壽經 のために、十惡五逆の罪人で常日頃念佛を申さなかつた

人が臨終に善知識に教へられて一聲の念佛を申すならば八十億劫の間

まよはねばならぬ十惡罪がほろび、十聲の念佛となつたなりばその

十倍の年月送はねばならぬ五逆の罪が滅びると書いてあるが、それは

十惡と五逆の罪との輕重を比較するために滅罪の利益を引合に出した

のであつて、決して念佛の功德を一念よりも十念、十念よりも百念と

比較してその輕重を云はんがためではないのである。一念よりも十念

が一層よく效くなると云ふことなれば、それは如來の本願に救はれる

のではなくして唇や心で誦へる自分の行の多寡によつて救はれ

ると云ふ自力的救はれ方となるのである。

○五官を信せず神の創造を信ずるのが信仰である。

〔智慧の言葉〕

十月十三日

罪を恐れず、罪消ゆる日

16

念佛すると云ふのは心の眼をひらく一つの動作である。(生命の實相)
○おほよそ、悪業煩惱を断じつくしてのち、本願を信せんのみぞ願に
ほころおもひもなくてよがるべきに、煩惱を断じなばすなはち佛なり、
佛のためには五劫思惟の願その詮なくやましき本願ほこりといま
しめらるゝとぐゝも煩惱不淨具足せられてこそさふらふげなれ。そ
れは、願にほこれるゝにあらずや。いかなる悪を本願ほこりといふ。
いかなる悪方ほこりぬにて候ふべきぞや。却りてこゝろ雅きことか。
○煩惱を無くしてからこそ佛の本願に依る資格があるなど云ふのは間
違である。煩惱が断ち切れぬ人間であればこそ佛の本願に依るので
ある。煩惱を断ち切つてふことが出来たり、それはもう其の儘で佛な
のである。煩惱ある人間を救ひ給はんがためにこそ、法藏菩薩は五劫
の長期間思惟に考がへを廻らされたのである。「悪をしながら佛の救ひ
に依るのは本願ほこりだ」などと非難する人も、どうせ五十歩百歩で
あつて、悪を犯してゐるのであるから、矢張り「本願ほこり」ではな
いか。どんな悪だけを「本願ほこり」だと云はうとするのか、そんな
ことを云ふのは却つて心がまだ稚いのだ——とは大分手厳しいが、
反語も混つてゐる。

○彼を信する者の、その名によりて罪の赦しを得べし。(智慧の言葉)

十月十二日 神に催される日

15

吾が生命は、よき水脈に穿たれた井戸のやうに汲めども盡きぬ(生實)
○願に誇りて造らん罪も宿業のもよほすゆへなり。されば、よきこと
もあしきことも、業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまいら
すればこそ、他力にては候へ。唯信抄にて、彌陀いばかりのちから
ましますと知りてか、罪業の身なればすくはれ難しと思ふべきと候ふ
ぞかし。本願をたのみまいらすればこそ、他力にては候ふぞかし。
本願に誇る心のあらんにつけてこそ、他力をたのみ信心も決定しめば
きことにて候へ。

○一切が業の催はすところであるとするならば「ひとへに本願をたのみ
まいらす」ことも業の催すところである。併し、これは本願の催すと
ころなのである。「信心よろこぶそのひとを如來とちと」と説き給ふ。
大信心は佛性なり、佛性すなはち如來なり」と彌陀和讃に親鸞聖人
がお説きになつてゐるのがそれである。信心は内部に宿る佛性の催し
なのである。而も佛性はどろして内部から開發され催して来るのであ
るか。善智識に遭ひ又は善き書物に觸れることである。善智識に遭ひ善き
書物に觸れるのは「自己のつくれる過去の業」によるか、さうすればそれは自
力となるのである。然らず、それは如來より迴施せられたる機縁である。佛縁であ
る。佛縁おろそかならず、善智識はその人にとり彌陀であり、善き書物
はその人にとりて、みだのせつばふである。

十月十一日 新生の日

14

われ既に天地を新たなりしめたのである。(生命の實相)

○また海河に網を曳き、釣をして世をわたるものも、野山に猪を獵り、鳥をとりていのちをつぐともがらも、あきなひをし田畠をつくりてするひともし、たゞ同じことななり。然るべき業縁のもよほせば如何なるふるまひもすべしとこそ聖人は仰せ候ひしに、當時は後世者ぶりして、よからんものばかり念佛まうすべきやうに、あるひは道場に貼文をして、なむしのことしたるんものを道場へいるべからずなどといふことを、ひとへに賢善精進の相をほかに示して、内には虚假をいだけるものか。

○爰に唯圓房は循環論法の手品に引つかいて、親鸞の眞意を失つてしまった。親鸞が一切の業の催しだと説かれたのは「わしが……わしが」の力を除り去つて他力の中へ溶け込むための隨宜説法で、宿業の中へ沈む爲ではない。全部が業の催しであるならば「道場に貼文する者」や「念佛は善き人ばかりが申すやうに云ふ人」も「業の催し」によつて、さうなつてゐるのであるから、それに對して、内には虚假をいだけるものと、非難する必要もないし、また唯圓房が非難するものも「業の催し」にあるとするならば誰か何を論はんやだ。循環無限、論議の遊戲に過ぎない。

十月十日 たゞ念佛する心の日

13

祈りには實相を顯現する祈りと人格的交渉の祈りとある（生實相）
○また害せじとおもふと心、百人千人を殺すこともあるべしと仰せの
候ひしは、われらが心の善しと思ひ、惡しきをばあしと思ひて、本願
の不思議にてたすけたまふことを知りざることを仰せの候ひしなり。
かへるあさましき身も本願に遭ひ奉りてこそ、げに誇られ候へ。
さればとて、身にそなへざらん惡業は、よもつくられ候はじものを。
○一人をすり害すまいと思つても害する業が催して來る時には百人千人
を殺すことにもならうと親鸞聖人が仰せられたのは、一切を宿業と觀ず
る極端な宿業觀を宣傳するためではなかつたのである。「自分の善行」だ
と誇る心、「自分の惡行」だと悲觀する心、この善惡二つながらに捉はれ
る心を踏み超えてはじめて、本當の心——何物にも捉へられぬ實相に
乗托せる心を出して來ることが出来るのである。「自分の善行」だと誇る
心も、「自分の惡行」だと悲しむ心も俱に虛假不實の心として棄て、ろは
ねばならぬのである。そのまゝの心を出して來るには善惡二つながら
に執しない心「たゞ念佛申される心」を要す。
「たゞ念佛申される心」に導くためにこそ親鸞聖人は「惡人却つて救は
る」の教をお説きになつたのである。
惡行をお勵めになつたのでは勿論ない。

十月九日 善業有りがたき日

祈いのつてから五官ごくわんに證據しやうこを求めらる。祈いのつた時既にそれは成就じやうじゆしてゐる。

〔生命の實相〕

○またあるとき唯圓房ゆゑんぱうはわがいふことをば信しんずるか、と仰おほせ候さうひしあひだ、さん候さうふと申し候さうひしかば、さりばわがいはんこと違ちがふまじきかと重かねて仰おほせの候さうひしあひだ、謹つしんで領狀りやうじやうまうして候さうひしかば、喩たとへばひと千人殺ころしてんや、然しからば往生おうじやうは一定いちていすべしと仰おほせさふらひしとき仰おほせにて候さうへども、一人もこの身の器量きりやうにては殺ころしつべしとも覺おぼえず候さうふと申し候さうひしがばさては如何親鸞いかしんらんが云いふこと違ちがふまじきとは云いふぞと。これにて知るべし。何事なにごとも心に委まかせたることならは往生おうじやうのためは千人殺ころせと云いはんは乃すなはち殺ころすべし。然しかれども一人にては殺ころすべき業縁ぎやうえんなきによりて害がいせざるなり。わが心のよくて殺ころさぬにはあらず。過去こくわに「つくれる罪つみ」の機械的流轉きかいてきるせんによつて一切いっせのものが内部ないぶから催もよほして來きるのであつたならば、其處そこに自由意志じゆういしはあり得えない。自由意志じゆういしがあり得えないならば、善惡ぜんあくはあり得えない。汽車きしやが疾走しつそう中大風ちゆうだふう吹ふき來きつて自由意志じゆういしならずして顛覆てんぷくして千人せんじんを殺傷ころしやうしようとも、その汽車きしやには自由意志じゆういしかなき故ゆゑに罪惡ざいあくとはならないのである。極端きよくたんな宿業しゆくごふ 觀かんは人間の道德だうとくを否定ひていする。「生命の實相せいめいのじつさう」第五卷だいごくわんには、宿業しゆくごふ 一いち、自由意志じゆういし 一いち、高級靈かうきふれいの修正しゆせい 一いち、となつてゐる。

十月八日 流れつゝ流れを超える日

11

佛教の無常觀は、實は生々流動の教である。

(生命の實相)

○よきこゝろの起るも、宿善の催すゆへなり。惡事のおもはれせらるゝも惡業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには、兔毛羊毛のさきに在る塵ばかりもつくるつみの宿業にあらざるといふとなしと知るべしとさふらひき。

○こゝに親鸞聖人の「業觀」がありはれてゐる。業が現象世界のすべてを流轉せしむる原動力であつて、よき心が起るも惡き心が起るも皆業が流轉して催して來るのであつてそれは宿命であり機械的であつて、自由意志の計らひ得る部分はないと云ふのである。「兔毛羊毛のさきに在る塵ばかりも、つくるつみの宿業にあらざるといふことなし」であるとするならば、その「つくるつみ」なるものは、誰が最初に「つくるた」のであるかの問題が生ずるのである。誰かが最初に造つたのであるならば、宿業ならざる自由意志的業の問題が生ずる。また誰も末だ「つくるつみ」を造つたことが無いとするならば、その「つくる罪の宿業」なるものも、有るやうに見えても本來無いものであると云ふことに歸着するのである。眞宗では「つくるつみ」の存在を認めて罪惡深重の凡夫と云ひ、生長の家では「つくるつみ」は存在せずとして罪本來無いと云ふ◎自分の本質の善さを信ずること、これが神に一致する一つの要件である。(智恵の言葉)

十月七日 自然と惡癖が治る日

10

佛敎の無明緣起は創世記の第二章アダムの原罪に一致する。(實相)

○歎異鈔第十三條、彌陀の本願不思議におはしませばとて、惡をおそれざるは、また本願ばかりとて往生がなふべからずといふこと。この條、本願をうたがふ、善惡の宿業をこゝろ元ざるなり。そのかみ邪見におちたるひとありて、惡をつくりたるものをたすけんといふ願にてあしませばとて、わざと好みて惡を造りて、往生の業とすべきよしをいひて、やう／＼にあらざる事なき候ひしとき御消息に、くすりのあればとて毒をこのむべからずとこそ遊ばされて候ふ、かの邪執をやめんがためなり。またく。惡は往生のさわりたるべしとには非ず。○阿彌陀佛のどんな惡人でも救はずに置かめ本願が如何に不可思議力であるかるとて、それでは盛んに惡を犯してやれと云ふのでは「本願ばかり」と云ふものであつて往生極樂は出來ない——斯う云ふ議論をする者は救ひは絶對であり、業は相對なのである事を知らぬものである。如何なる業もそれを超越して彌陀の本願は救ひ給ふ。その絶對的救ひの否定し難き事實とは別に、惡人を救はうと云ふのが彌陀の本願であるとしてわざと好んで惡をする者がある由聽えて來たときに親鸞聖人は「くすりあればとて毒をこのむべからず」とお書きになつた。

◎どうしたら良くなるだらうかなどと思ひ煩ふな。既に良のだと思へ。(智慧の言)

十月六日 信心極まる日

9

女の信ずるごとく汝になるのである。

〔生命の實相〕

○學問せば愈々如來の御本意をしり、悲願の廣大のものを存知して、卑しからん身にて往生はいかなんとかあやぶまんひとにも、本願には善惡淨穢なきおもむきをも、とさきかせられ候はいこそ、學生の甲斐にても候はめ。偶々何心もなく本願に相應して念佛するひとをも、學問してこそなんと言ひ敗ざるゝこと、法の魔障なり、佛の怨敵なり。みづから他力の信心かくるのみならず、あやまて、他をまよはさんとす。つゝしんでおそれるべし、先師の御心にそむくことを。かねて憐むべし、彌陀の本願に非ざることをと、云々。

○慈には學問は學問を破推するためにこそ學ぶべきであつて、學問を誇るがために學ぶなどと云ふことは學問に捉はれたものであることが示されてゐる。學すればするほど自分の醜い相が眼に着いて來て救はれがたいなどと思ふ人には、こちらの學を以て「彌陀の本願には淨穢がない」と説破してやらねばならぬ。「生命の實相」もその中の字句を甲是乙非と議論するためにて色々の諸學説が引用してあるのではない。人間は救はれ難しと色々の科學から結論してゐる人々に如來の慈悲を説き聽かせてあげるためにこそ「生命の實相」の學があるのである。

◎人間は本來「惡人」ではない。善の善の善の善の極致であるのが實相である。(生命の實相)

十月五日 神の慈手を抱かるゝ日

8

汝の悩みを神に語れ、人に語らずして神に語れ。(生命の真相)

○故聖人のおほせには、この法をば信ずる衆生もあり、そして衆生もあるべしと、佛説き置かせたまひたることなれば、われはすでに信じてまつる。またひとありてそして、佛説まことなりけりとしりれさふりふ。しかれば往生はいよく一定とおもひたまふべきなり。あやましてそしてひとのさふらはざらんこそいかに信ずるひとはあれどもそしてひとのなきやらんともおぼえさうひめべけれ。かくまうやばとて、かならずひとにせしられんとはありず。佛のかねて信謗ともにあるべきものを知らしめして、ひとの疑ひをあらせじと説きをかしたまふことをまうすなりとこそさふりひしか。いま世には、學問してひとのせしりをやめん、ひとへに論議問答をむねとせんとかまへりれさふりふにや。

○更に茲には親鸞聖人の法を謗る法敵さへも佛の豫言の中に、従つて佛の攝理の中にある事を示して、諍うこゝろを捨てせしめようと云ふ用意が見られるのである。學問して他に論ひ勝たう議ひ勝たうと思ふこゝろは餘りにも腦髓智識に對する力みである。腦髓智識によつて人が救はれるならば諸々の智者は救はれたであらうが、救は貧しきもの愚かなる者に示されるのである。

十月四日 有り難く其儘受ける日

7

如來は皆一體である。一佛即多佛である。(生命の實相)

○たとひ諸間こぞりて念佛は甲斐なきひとのためなり、その宗あざし卑しといふとも、さらにあらそはずして、われらがごとく下根の凡夫一文不通のもの、信ずればたすかる由うけたまはりて信じさふらへ、更に上根のひとのためには卑しくとも、われらがためには最上の法にてまします。たとひ自餘の教法はすぐれたりともしもみづからがためには器量およばざればつとめ難し。われもひともし生死を離れんことこそ、諸佛の御本意におはしませば、御妨げあるべからずとて憎ひげせずば誰のひとかありて仇をなすべきや。かつは、諍論のところにはもろもろの煩惱おこる。智者遠離すべきよしの證文さふらふにこそ。

○この一節には當時親鸞聖人の念佛門の教に對して色々の批難や攻撃があつたことが窺はれるのである。親鸞聖人はそれに對して「われらが如下根の凡夫は」と下手に出て諍ふこと勿れと諭されたのである。「諍論のところにはもろくの煩惱おこる」として智者はかゝる諍ひより遠ざかるべきを示されたのである。諍ひに勝ちたりとて救はれるのではない。此のまゝ此の世阿彌陀佛のお浄土であると、その實相を并ませていたゞくとき救はれるのである。

◎實相を正しく觀、その教への真髓を拜み顯すことなのであります。(生實)

十月三日 争ひの自然に消ゆる日

6

雑念は心を澄み切りす働き、雲は空氣を澄み切りす働き（朱の實相）
○學問をむおとするは聖道門なり、難行となづく。あやまて、學問して名聞利養のおもひに住するひと、順次の往生いかゞりんずらんといふ證文もさうゆうぞかし。當時事修念佛のひとと、聖道門のひとと、評論をくはだて、わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はおとりたのといふほどに、法敵もいできたり、謗法も起るなり。是併しながら自らが法を破謗するにあらずや。

○親鸞聖人が易行門を立てられたのは、聖道門よりもわが宗旨がまさつてゐるとしてそれを誇るためではなかつたのである。自分は下根の凡夫である、一文不通のものであつて、一切の藏經を調べあげ研究しあげたすゑに救はれるのであつたならば、到底そんな智慧學問は無いところの吾らであるから救はれやうがないからこそその易行門の信仰なのである。聖道門を相手にまはして易行門の優越性を説いて、ひとの宗派は劣つてゐるなどと説くから法敵と出で來たり、法を誇る人も出で來て來るのである。だから他宗を攻撃するのは、天に對つて唾するやうなもので、自宗に對して傷つけることになるのである。——かう云つて親鸞は當時日蓮の「念佛無間・禪天魔」の批評をも黙殺してかゝられた。誠に大調和のお心であつた。

十月二日 内在の念佛を聴く日

3

淋しき時は我を思へ。我は汝らの爲に祈るものなり。(「生命の實相」)

○他力眞實のむねをあかせるよろくの聖教は、本願を信じ、念佛を
まうさば佛になる、そのほか何の學問かは往生の要なるべきや。まこ
とに、この理に迷ひはんべらんとは、いかにむいかにも學問して本
願のむねをしるべきなり。經釋をよみ學すといへども、聖經本意をこ
ころえざる條しも不便のことなり。一文不通にして、經釋の端緒も
知らざらん人の、となへやすからんための名号におはしますゆへにい
ざやうと云ふ。

○他力眞宗と生長の家とは随分その救ひの立て方が似てゐるのである。
眞宗で「他力」と云ふところを生長の家では「實相」と云ふ。眞宗で「念佛」
と云ふところを「生命の實相」を讀め」と云ふ。「他力」は「大信心」であり「大
信心」は「佛性」であり、「佛性」は「實相」である。「他力」に救はれると云ふ
ことは「念佛申す心」(實相)に救はれてゐると云ふことである。「生命の
實相」を讀んで、その經釋が完全に出來るから救はれると云ふのでは
ない。盲目の子でも母はそれに乳房を與へて救つて下さつてゐるのであ
る。どんな母であらうかと「知りたい心」は經文を解釋するやうな誇つ
た心ではなく、母懷しさの心に過ぎない。

◎本來自己のうちには全てがある。たゞ見出さないだけである(智恵の喜樂)

十月一日 心澄み切る日（歎異鈔八月号十二條より續き）

2

○雜念妄想は念佛を妨げず、虚の念は本來無い念である。（生命の實相）
○歎異鈔第十二條。經釋をよみ學せざるともがら、往生不定のよしの

こと。この條、すこぶる不足言（いふに足らぬ）の義といひつべし。

○前條等にも繰返し繰返し述べられてゐるやうに、人間が救はれると云ふのは彌陀の誓願によるのである。すなはち彌陀の誓願が廻り向いて來て、念佛をすすと云ふ信心の心が起りその信心の心は、自我の心で信心するのでなく、學問の力で信心の念が起るのではなく、經文やその註釋の力で信心の念が起るのではなく、「信心」と云ふものは如來が廻施（廻施は如來のちからが廻り施される）のであるから學問がなかつたら救はれない、經文の解釋によつてゐなかつたら救はれないと云ふやうな議論は云ふに足りない。誌友會に出ても色々と眞理の書の文章を批判し、此の書には斯う書いてある、自分は此の方に共鳴するとか何とが、甲論乙駁する人たちがあつて、さう云ふ人々は經釋によつて救はれようとする人であつて、自力の行である。他の色々の本に斯う書いてある、彼書いてあると云つて誇り顔に云ふ人は、又別の新しい説き方をする人があつたら直ぐ信仰が崩れて了ふのである。救はれるのは「實相」により、念佛によるのであるから、誌友會に臨んでは理窟を云ふよりも、たゞ有りがたく救はれてゐる體験を謙遜に語り合ひ、互に讃嘆すべきである。

光昭の音信

亜町生長の家誌友會 發行

『取越苦勞』ではない。心が整へば秋から冬に要するものがちやんと判つて、自然法爾に其の要する物を用意したくなるのである。自然法爾と云ふものは、外から自然に興へられることばかりではない。内から自然に催して来る心の中にも自然法爾がある。心が乱れて病氣になつたとき心が調へば其の病氣を治すに適當な食物が欲しくなるのも自然法爾である。野の鳥も卵を産む前に自然に巢を造りたくなる。卵を産む前に巢を造つても小鳥は『取越苦勞』をしてゐるのではない。『生長の家』の生活は物質に捉れない生活だと云つても、物質をきたながら生活ではない。金錢を織いものゝやうに思つて、それを捨ておは氣が安まらぬやうな心も物質に捉れてゐるのである。物質は影であるから綺麗も穢もない。卵を産む前に小鳥が巢を造りたくなるやうに自然に用意したくなる時には内からの囁きに導かれて好いゝ心が調へば、その心の展開として用意すべきものは適當の時に用意したくなる。すべて用意するものを信仰淺きものと思ふな。用意しないで取越苦勞をしてゐる生活もあれば取越苦勞をしないで自然に用意してゐる生活もある。

(昭和六年十一月五日)

◎ 信仰生活の神示

十月号

2

信仰生活とは無用意の生活ではない。総てに於て完全に用意されてゐる生活である。凡そ信仰生活ほど完全に用意されてゐる生活はない。それは心が完全に用意されてゐるだけではない。物質にも完全に用意されてゐる生活である。物質は心の影であるから心が完全に用意されてゐる時、物質も必要に応じて完全に興へられるのである。家庭は一つの有機体であるから、良人が明日の用意をしないときには妻が明日の用意をするやうになる。妻が明日の用意をしないときには良人が明日の用意をする。右の手が利かなくなつたら左の手が利くやうになるのも同じことだ。それは自然の代償作用でさうなるやうに計らひがあるのである。それは有難い自然の計ひであるから、夫婦互に感謝するが好い。信仰生活とは明日の用意をしない生活だと思つて、明日の用意をする配遇を信仰がないと思つて夫婦が争つてゐる信仰深い家庭があれども、みんな誤つた信仰である。「あすのことと思ふ煩ふな」と云ふ意味は「明日の用意をするな」と云ふことではない。信仰生活とは冬が来てから綿入を縫へと云ふやうな生活ではない。秋から冬に要る綿入を縫て置いて、それは

◎明鏡は臺に非ず、人間は肉体に非ず

1

禪宗は第五祖の弘忍大師に到つて愈々その教盛んになり、大師のもとに参究する弟子七百人を数ふ。その弟子中の上座をなしてゐたのが神秀であつて、その名聲他の弟子を壓してゐた。後の六祖慧能、風を聞いて弘忍の下に来る。弘忍は慧能をして八ヶ月間、米搗をさせて置いた。或日弘忍愈々衣鉢を傳ふべき時が来たことを知り、すべての弟子に自己の悟を書いて差出すやうに命じた。上座の神秀は我こそ衣鉢をつぐべきものであると思ひ、得々然として自己の悟を次の如く書いて廊下の壁に掲げて置いた。「身は是れ菩提の樹、心は明鏡の台の如し時々勤めて拂拭して塵埃ありしむる勿れ」衆僧これを見て流石は上座の神秀であると感嘆した。併し、これは身体もあり心もあり、迷もあり、塵埃もあり、と捉れてゐる見方なのである。米舂男の慧能これを聴て「まだ悟つてゐない」と批評し、その夜廊下の壁に「菩提は本樹に非ず」明鏡もまた臺に非ず、本來無一物、何ぞ塵埃を拂ふを假らん」と一童子をして書しめた。弘忍大師これを見て感嘆し、つひに衣鉢を慧能に傳へたのである。神秀は肉体人間を、あるがまゝにあるとして修養の道を説いた。これも確かに結構であるが、慧能は肉体人間を飛び越えてたゞそのまゝで救はれてゐる、自性圓滿の實相の中に跳込んで了つたのである。◎どこを把むか？應へて曰く「實相を擲め。」

(生命の實相)

目次

◎ 卷頭言

◎ 明鏡は臺に非ず

◎ 人間は肉体に非ず
信仰生活の神示

◎ 光明の音信

◎ 不信仰は迷信の因

◎ 實相体験集

一 前月号より續き
小兒麻疹症より救はる

◎ 消息欄及び後記

◎ 英譯生命の實相

卷頭言、愛の深さは、谷口雅春

愛は生かし、愛は育て、愛は癒すのである。
愛は身を捨てることだ。自己を殺し、自己を鞭うち、
自己を無くするのだ。此のやうな愛のみが他を
生し、育て癒やすことが出来るのである。自分が
可愛いやうなことで、自分の子供のみが可愛やうな
ことで、他の子供は預かれるものではない。あとの教育
を引受ける限りは是丈の決心がなければならぬ。
愛するが故に生ずると、愛するが故に却つて愛に捉は
れて自由を失つて殺す人とかある。愛は甘いものでは
ない。煩惱が甘いのだ。本當の愛は峻厳なるもので
峻厳を失つたとき、愛はたい相手を甘やかし、相手
を墮落させる動機となるばかりである。併し峻げ
んのみが愛ではない。愛のない癖に自分の冷淡さを胡
麻化したために自分の愛は「峻厳な愛」であるなど
と云つてゐるものは唾棄すべき詐欺漢である。愛とは
自分を捨てることだ。自分を捨て、ゐるものは峻厳で
あり、同時に無我憚だ。自他一体だ。それか即ち
愛だ。愛の深さは、外見の深切らしさの深さでは測ら
れない。自分を捨て、ゐる程度が愛の深さである。

光の音信



一九四四年一月創刊

亜町生長の家誌友會 發行

第一輯

十月號